中国古典文学大系 51

官場現形記 下

李宝嘉 作　入矢義高・石川賢作 訳

老残遊記・続集

劉鶚 作　岡崎俊夫・飯塚朗 訳

平凡社

訳者紹介

入矢義高（いりやよしたか）　1910年鹿児島県生。京都大学文学部卒。専攻　中国文学。現職　花園大学教授。著訳書「寒山」「寂宏道」（岩波書店「中国詩人選集」）「元曲選釈」第一・第二集（共著）

石川賢作（いしかわけんさく）　1930年大連市生。名古屋大学法学部大学院修了。専攻　現代中国論。現職　安城学園大学教授。著訳書「六十年の変遷」（平凡社「中国現代文学選集」）

岡崎俊夫（おかざきとしお）　1909年青森県生。1959年没。東京大学文学部支那哲学科卒。専攻　中国文学。元東大講師。著訳書「太陽は桑乾河上にかがやく」（河出書房）「三里湾・李家荘の変遷」（新潮社）「抗日戦回顧録」（平凡社「中国現代文学選集」）

飯塚朗（いいづかあきら）　1907年神奈川県生。東京大学文学部支那文学科卒。専攻　中国文学。現職　関西大学教授。著訳書「断鴻零雁記」（改造社）「啼笑因像」（生活社）「情史」（新流社）「北望園の春」「家」（岩波書店）「林海雪原」（平凡社「中国現代文学選集」）

中国古典文学大系　全60巻

官場現形記（下）　老残遊記　老残遊記続集　第51巻

1969年6月5日　初版第1刷発行
1984年12月15日　初版第9刷発行

訳者　高作夫朗　義賢俊　矢川崎塚　入石岡飯

発行者　東京都千代田区三番町5番地　下中邦彦

発行所　郵便番号　102　東京都千代田区三番町5番地　振替・東京8-29639　株式会社　平凡社

不良本のお取換えは直接読者サービス係までお送り下さい（送料は小社で負担します）。
定価は外箱に表示してあります。

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社　石津製本所

© 株式会社　平凡社　1969　Printed in Japan

目次

官場現形記 下

李宝嘉 作

第三十九回 …… 三
銭惜しみの恐妻役人がヤブ医者に痛めつけられ
友の義侠でまんまと妻を出しぬき妾を囲うこと

第四十回 …… 一五
仲間の古狸が弁舌たくみに奥方の雷を取り鎮め
コツを伝授されてヘボ知事がとんだ裁きをやらかすこと

第四十一回 …… 三〇
イカサマ知事が土地の有力者どもに留任運動を頼み
前任の会計係が帳簿引き継ぎに当たって改竄を加えること

第四十二回 …… 四二
上司への祝儀の安上がりを喜んで知らぬまにワナにはまり
ヘボな満州人官吏が風流を気取っていい気になること

第四十三回 …… 五三
総督のでたらめな生活ぶりに部下はひどい目に会い
しがない役人が父子相伝の秘訣をひけらかすこと

第四十四回 …… 六七
はじめて晴れの場に出て茶碗を割ってしまい
祝儀の奪い合いで組み打ちの大喧嘩になること

第四十五回 …… 八四
いかさまな拘引状を出してヘボ警視が顔をつぶし
出世運のいい知事が大気焔で吹きまくること

第四十六回 …… 一〇〇
舶来嫌いの大臣がすごい大金を掻き集め
そのドラ息子が一計を案じてそいつをせしめること

第四十七回 …… 一一四
学をひけらかすたびにトンマなまちがいをやらかし
経費節約のため自分の手で阿片の精製をいそぐこと

第四十八回 …… 一二五
上司の借金をひそかに返済してやって信任を博し
ニセの軍令書をつかませて友人を陥れること

第四十九回……一四〇
亡夫の遺産を火に投じて未亡人が妾たちを恨み
古狸の役人が密かにデマをまいて妾を追い出すこと
第五十回……一五五
妾たちが飼い犬に手を嚙まれてゴッソリしてやられ
横暴役人を押えるにはヤソ教徒になれとボーイが説くこと
第五十一回……一七三
手をかえ品をかえて悪徳官吏が才智を働かせ
神出鬼没のカラクリに未亡人たちを手玉にとること
第五十二回……一八九
嗣子を名乗って出た食わせ者がヌケヌケと有卦に入り
岳父の威光を笠にエセ紳士が採礦権を外人に売り飛ばすこと
第五十三回……二〇四
うすのろ役人が渉外事務のばかげた堪能ぶりをひけらかし
内辨慶の総督が外人操縦の秘訣を伝授すること
第五十四回……二一八
ヘボ役人が回教をヤソ教と取り違えてトンマな外交儀礼をやり
民権尊重とやらの名目で商工会議所を設置すること
第五十五回……二三〇
中国側の艦長が外国の提督に土下座の敬礼を捧げ
州の補佐官がおのれの昇進のことで外国提督に哀訴すること
第五十六回……二四七
ヤミの出張命令書をもらった公使随員が帰国して有卦に入り
閣下の身内の者が替玉受験をやって一騒動持ち上がること
第五十七回……二六六
したたかな古狸が官界立ち廻りの秘訣を鼻にかけ
殺人事件をめぐって対外折衝に妙技を演ずること
第五十八回……二七九
巡撫閣下がお抱えの外人顧問に手ひどくやられ
頑固な老学者が洋行帰りの青年にケンツクを食わせること
第五十九回……二九六
胸に一物の男が工事監督の妻君に取り入り
ついに会計係となって威勢をふるいはじめること
第六十回……三一〇
官界生活の辛酸甘苦を夢に託しての物語
喜怒哀楽もすべては文章がはじまり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

老残遊記

劉鶚作

自　叙……三三五

第一回……三三六
土　水を制せずして歴年患を成し
風　能く波を鼓して到る処危むべし

第二回……三三三
歴山の山下　古帝の遺踪
明湖の湖辺　美人の絶調

第三回……三三九
金線　東に来りて黒虎を尋ね
布帆　西に去りて蒼鷹を訪ぬ

第四回……三四七
宮保　賢を求め才を愛すること渇するがごとし
太尊　盗を治し悪を疾むこと仇のごとし

第五回……三五四
烈婦　心ありて節に殉じ
郷人　意なくして殃に逢う

第六回……三六一
万家血を流して　頂　猩紅に染まり
一席心を談じて　弁　狐白を生ず

第七回……三六九
箸を借り　代わって一県の策を籌し
納楹　閒に百城の書を訪う

第八回……三七七
桃花山の月下に虎と遇い
柏樹峪の雪中に賢を訪ぬ

第九回……三八四
一客　詩を吟じ手を負にくんで壁に面し
三人　茗を品べ膝を促して心を談る

第十回……三九三
驪竜双珠の光　琴瑟を照らし
犀牛一角の声　箜篌を叩す

第十一回……四〇一
疫鼠　殃を伝えて害馬と成り
癩大　災を流して毒竜と化す

第十二回……四〇七
寒風　黄河の水を凍塞し
暖気　白雪の辞を催し成さしむ

第十三回……四一七
娓々たる青燈　女児の酸話
滔々たる黄水　観察の嘉謨

第十四回……四二四
大県　蛙のごとく半ば水面に浮かび
小船　蟻のごとく饅頭を分り送る

第十五回……四三一
烈焰　声ありて二翠を驚かし
厳刑　度なくし孤孀に逼る

第十六回……四三七
六千の金　凌遅の罪を買い得
一封の書　喪門神を駆い走らす

第十七回……四四四
鉄砲一声　公堂に索を解き
揺琴三畳　旅舎に環を含む

第十八回……四五二
白太守　談笑のうちに奇冤を釈き
鉄先生　風霜のなかに大案を訪ぬ

第十九回……四六〇
斉東村に重び鉄串の鈴を揺り
済南府に巧みに金銭の套を設く

第二十回……四六八
浪子　金銀伐性の斧
道士　冰雪の返魂香

老残遊記 続集

劉鶚 作

自　序……四七九
第一回……四八〇
元機　旅店にて竜語を伝え
素壁　丹青にて馬鳴を絵く
第二回……四八八
宋公子　優曇花を蹂躪し
徳夫人　霊芝草を憐惜す
第三回……四九六
陽は偶　陰は奇　大道に参し
男歓び女悦び　初禅を証す
第四回……五〇三
九転　丹を成し　壁を破りて飛び
七年　本に返り　家に帰りて坐す
第五回……五一〇
俏逸雲　慾を除きて除き尽くし
徳慧生　人を救って救い澈す
第六回……五一九
斗姥宮中に逸雲　法を説き
観音庵裡に環翠　塵を離る
解　説……五二九

官場現形記

下

李宝嘉作

石川賢作　入矢義高　訳

第三十九回

銭惜しみの恐妻役人がヤブ医者に痛めつけられ
友の義侠でまんまと妻を出しぬき妾を囲うこと

さて瞿の妻君が総督の役所から家へ帰って来て、まだ轎を下りないうちに、旦那様が足を折ったと聞かされると、もうたいへんな驚きよう、あわてて尋ねるには、

「あんなに元気な人が足を折るなんて！　いったいいつのことなの」

「今朝がた、旦那様は奥様のお出ましをお見送りのあと、すぐ局のほうへ出勤なさいました。しかし一日じゅううなだれて考え込んでばかり、さっぱりお元気がなく、食事もなさらずにご帰館になりました。門をおはいりになると、すぐズボンの前をあけて用をたそうとなさいました。私ちょうどそこを通りかかりました時、見れば小便壺の埋めてある所が湿っておりまして、それに、誰が落としたのか銅銭がひとつそこに落ちておりました。旦那様は銅銭に気がつかれますと、しゃがんで拾おうとなさいましたところ、どうしたことかアッとばかりに滑りこけ、体じゅう小便だらけになられたのはまだしも、今度はウワッという旦那様の声、足を折られたのでございました」

妻君はどなりつけて、

「このオタンチンめ！　その地面の金を、なぜお前たちが拾わずに、旦那に拾わせたんだね！」

「実は私はお金を見ませんでした。あとで旦那様がそうおっしゃいましたんで」

「折れた足はどうなのかい。医者に診せたのかえ」

「お倒れになりました時は、ただもうウンウンうなっておいでした。旦那様のお体はあんなに大きいものですから、私一人の力では動かせません。やっと小使や料理番や轎かきを呼んで来まして、みんなして奥の部屋まで担いでゆき、ベッドにお休め申し上げました。うまいことに、それ、あの外国語のできる胡二さまが用事でお見えになっておりましたので、この話を聞くとあわてられまして、こうおっしゃいました――『わしら役人というものは、この二本の足のおかげで仕事がやれるのじゃ。叩頭も、半跪の礼も、それに走ることもな。そいつを折ってしもうては、商売道具が上ったりじゃ』と、たいへんご心配になり、内へはいって旦那様のご容態をご覧のうえ、外人医師に診てもらおうと、すぐ呼びに出かけられました」

妻君はびっくりして、

「なんで外科の先生を呼ばなかったの。外人医師は、とてもうちでは呼べないよ」

「旦那様もやはりそういうお考えでございましたんです。それで、胡二さまがそういわれるのを耳にされますと、もうヤッキになって、『うちの財産そっくり出しても支払い切れん。カタワになったほうがましじゃ』と喚かれました。ところが胡二さまは、どうでもそうするといい張って、自分でその医師を連れて来られました。旦那様はどうしても断わるとおっしゃいましたが、胡二さまは旦那様の足をつかまえて、どうしても診させろとおっしゃいました。外人医師は診察しますと、『治るには治るが、歩けるようになっても、ビッコは免れませんな』というお話。胡二さまが『ああ、よいよい。歩けさえするなら、叩頭でも半跪でもできる。ちんばでもたいしたことないよ』とい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

われますと、医師は『叩頭と半跪だけのことなら太鼓判をおします』といいました。あとで胡二さまが医師に『そんなら治療を引き受けてくれ』とおっしゃいましたら、三十両でなら、という返事でございました」

「で、旦那様はなんといわれた？」

「とてもあわてふためいて、そっと胡二さまの袖を引っぱって、手をふってお見せになり、それは断わると合図なさいました。で、胡二さまもしかたなく、二言三言ペラペラいって、その医師といっしょにもどられました」

この話を聞いて、妻君はやっと胸を撫でおろした。すぐに奥部屋のほうへ行きながら、ボーイに、

「外科の先生を呼んで診てもらったかえ」

「陰陽師の先生に往診していただきましたのですが、なんでも十五円とかを請求されましたので、旦那様は高すぎると断わられました。今度は辰巳の護符書きの道士を呼び込んで、一枚それを書いてもらいましたが、一銭もいらぬ代わりに、効きめもありませんでした」

「なんでそうと早く知らせなかったんだね？」

「私いそいで戴公館へ駆けつけましたところ、総督閣下のお邸へお越しとのことでございました。奥様、そんな場所へは私などがはいっていけましょうか。それで、私は帰って参りました」

と話しながら、妻君は奥部屋へ足をふみ入れ、様子を見ると、旦那はベッドでウンウンといっている。とばりをそろりと開けて覗き込み、一声、

「どうして足を折ったりなぞなさったの？」

と声をかけ、また、

「今は痛みはどう？　あの護符書きは、カタワにならないですむと請け合ってくれましたか」

彼は痛さで気が遠くなっていたが、妻君の声を聞くと、やや気がついた様子。しかし、やっと二言三言――

「お帰り。今日はわしは死ぬほどのめにあった」

というなり、またもや唸りつづける。妻君はベッドの端に腰掛け、ホッと溜息ついて、

「あたしたち、お金を拝んだことがないわけじゃないのに！　あなたお金が入用なら、遠慮なくいうて頂戴。なんとか都合つけて上げます。なにも銅銭一つぐらいで足を折ることはないでしょ。もし万一治らなかったら、ほんとに叩頭も半跪もだめになって（役人が勤まらなくなること）、一生おじゃんじゃないの。いったいわたしは何を当てにして生きたらいいの」

というなり、ウッウッと泣きはじめた。

「泣きなさんな。さあ、帰って来たなら、誰か医者を探して診てもらわなくちゃ」

「外人医師は高いし、どうしても呼べはしないわ。その話はやめましょう。さあ、みんな、早く外科の独眼竜の王先生をお呼びしといで。いくら請求されても、わたし払うわ。ぜひ今夜じゅうに来てもらうのよ、寝ていてもたたき起こしといで！」

従者は出ていったが、帰って来ると、

「王先生の仰せには、十時を過ぎたなら、たとい八人かつぎの轎で迎えに来ても行かん、話は明朝にしてくれ、ということで」

「このとんまめ！　もう一度行って、こういうといで――今度来なかったら、総督府の人を呼んで、しょっぴいて来させるって！　それでもイヤというかどうか」

というと、すぐ轎で総督府へ行くつもりだった。彼はそれを見てと

ると、何度も手をふって、
「いま何時だと思う？　行っちゃいかん、行っちゃいかん。お前、往復にどんだけかかると思う？　待ってる間に夜が明ける。それから呼びに行けば、きっと来るさ。なにも夜ふけに総督府まで行って騒ぎたてることはない。呼べば、どうせ治療代は一銭だって欠かしちゃならないんだから。もうちょっと我慢するよ」
　妻君は考えてみたが、いかにももっともな話なので、しかたなく彼のいうとおりにした。
　果たして一刻もたたぬうちに夜が明けた。それから少ししして、妻君はいそいで独眼竜の王先生を呼びにやった。だいぶんたってから、やっと帰って来ると、
「先生は今起きて、外来の診察中でございます。それがすまぬと往診できぬそうで」
　夫婦はしかたなく、じっと待っていた。ところがなんと、時計が午後四時を打ってから、やっとやって来た。すぐ奥へ通すと、まず、
「いったいどんなふうにころんだのじゃな」
　彼はいそいで足を出して見てもらった。王先生は片目である。頭をかしげ、目をすがめ、ひとわたり見終ると、
「関節がはずれているな。引っぱりさえすりゃ治る。たいしたことはないて」
　妻君はとばりの後ろから、
「それなら、どうか一つ引っぱってみて下さいな」
「ほかの人なら、五十円もらうところじゃが、あんたの所は一割引にしてあげる」
　妻君はびっくりして舌を出し、
「ずいぶんな値段ね。どうして外人の医者よりも高いんです」
　王先生はブスッとしている。妻君は何度も折衝を重ねた。先生の曰く、
「わしの治療代は、そういう値段だ。金が惜しけりゃ、なにもわしを呼ばんでもよかろう。あんた方もご承知じゃろう――ご主人の足は値の高い足じゃ、普通の人間の足のように叩頭も半跪もせず、いい加減ですむというものじゃない。わしが手がけたら、四五日で歩けるようにしてあげる。外側には外用薬を、内側には内服薬を使う。この薬にはな、真珠八宝、貴重な成分はみなはいっておる。じゃが、その処方箋は四十円する。もし引っぱるだけで、薬はいらんということになっても、半時間の手間がかかるんじゃから、少なくとも五円はもらう」
「じゃ、引っぱるだけで、薬はやめていただきましょう、どうでしょうか」
「それでも差支えはない。じゃがな、治りが遅くなる。痛めたのは骨じゃというても、骨の周りの肉も、そのために血が通わぬ。血の通わぬ肉は、死んだも同然、そのうち段々と腐ってくる。腐った時は、薬を塗ってから、腐肉を切り取らにゃならん。あれこれ合計すると、費用は今よりかさむし、日数もかかる。まあ、胸算用してみなされ。わしはいわれるとおりにやる。こうでなくちゃならんというのじゃないから」
　妻君は考えてみた――四十五円はどうも高すぎる、ともかく関節を引っぱってもらうとしよう。薬なら、この人のを使わなくてもいい。昨日、義母さんとこで見たけれど、ガラス戸棚の中に、打ち傷の薬でも皮膚の薬でもみんなそろっていた、それを少しもらえばたりる、この先生の薬よりも上等かもしれない。ハラが決まると、
「いい薬がこちらにあります、総督閣下のところからもらえるのです。先生にはうまく引っぱっていただくだけで結構ですわ」

錢惜しみの恐妻役人がヤブ医者に痛めつけられる

王先生は商売不成功と見ると、一つには心中おもしろからず、二つには自分の腕も怪しいときているため、よしそれならと、委細かまず、すぐ瞿耐庵の足を引っぱりにかかり、故障の個所を見定めて、両手で力まかせにグッと引っぱった。とたんに彼はワッという悲鳴とともに、気が遠くなってしまった。

その叫びをとばりの後ろで聞いた妻君は、これはいかんと、すぐ大股で前へとび出し、

「どうしたんです」

と尋ねたが、先生は無言。とばりを覗き込んで見ると、旦那はもう両の目がひっくりかえり、息づかいもなく、頭には大豆ほどの汗の玉が浮いている。この様を一見して、これは先生の引っぱり損ないだとわかった。と見れば、先生は両の袖をたくし上げ、患者の足を両股にはさみつけ、さらにばか力で引っぱろうとかかっている。妻君あわてて、

「先生！　やめて！　もう一度それをやられては、もともと折れてない足でも、折れてしまうかも知れません。ほら、死ぬか生きるかのところですよ」

といいつつ、旦那の人中（鼻と上唇の間のたての凹み）を指で押え、けんめいに揉んでやった。幸いに、しばしあって少しずつ正気にもどり、ウンウンと痛がっている。一同、旦那が息を吹き返したのを見て、やっと安心した。

王先生は妻君から恨まれたので、やむなく手を引っ込め、そこに立ったまま、目をすえて茫然としていたが、やっとこさ旦那が生き返ったのを見ると、またもや進み出てもう一度やらかそうとする。妻君はあわてて手をふり、

「もうやめて！　今度やられたら、旦那さんはあんたに殺されるわ！　さあ、受付にいいつけて、さっさと先生に足代を差し上げて帰っておもらい」

王先生はしかたなく従者について受付に行くと、四百文の足代を出された。先生は不承知で、どうしても五円ほしいという——

「わしは来てくれといわれて来たんだぞ。奥さんとはっきり話をつけて、薬なしで五円となっとるんだ。さっき、治療はいらんと断わられたが、わしが治療せんのじゃない。それに、こんなに値切るとは理不尽じゃ」

受付の曰く、

「先生の腕はお見事ですよ。それだからお断わりしたんです。正直にいうと、あんたの腕は一文の値打もないですぜ。いま四百文あげれば、もうそれであんたの面子は立つわけですぜ。さあ、さっさと……」

受付の男からこうやられては、王先生はいよいよタダではおかぬという気になり、受付の中に腰をすえて出ようとしない。

「お前らがわしの看板に泥を塗る気なら、よし、トコトンやり合うてやるぞ」

「このクソッタレめ、まだ行かんのなら、こうしてくれる」

というなり、手をのばして王先生をポカポカとやっつけた。先生はカッとなると、地面に大の字になって、「巡査！　人殺しだ！」とわめいている。

騒ぎが大きくなって、奥部屋まで聞こえた。瞿耐庵はベッドに寝たまま、

「みんな、あいつと何を喧嘩してるのだ。すこし金をたしてやって、帰らせろ」

すると妻女が、

「あなたお金があるなら、おやりなさい。わたしにはそんな余裕はありませんよ。あの人は帰りたけりゃ自分で帰ります。もし帰らぬというなら、閣下の役所に申し出て、首県知事に拘引させます」

といいながら、自分で外へ出て来ると、一同に命じて彼を追っ立てようとした。その騒ぎの最中に、ひょっこり胡二の旦那が見舞いにやって来たので、妻君はいそいで奥へすっこんだ。胡二が尋ねた、

「なんの騒動かね」

受付がわけを話すと、さすが胡二は大局を見る人、一同をとりなしたうえ、ポケットから一円銀貨を取り出して彼にやると、やっと彼は腰を上げた。そして、行きしなに、

「今日のところは、もし胡さんの顔がなかったら、やつとトコトンやるつもりだったんだ」

と捨てぜりふすると、着物をはたき、胡氏に別れを述べて出て行った。

胡二は従者について内にはいった。妻君はまだベッドの陰に隠れている。胡二はすぐ尋ねた、

「兄さん、足はどうです。治りそうですか」

耐庵は口もきかず、頭をふるばかり。

胡二は彼の義兄弟だから、ひどく心配をして、従者のほうを向いて、

「外人の医師も呼ばず、中国の医者もこんなふうでは、何か方法を講じて、しかるべき人を頼んで診てもらわなくちゃ。ほっといちゃいけない。こんな様子では、いつになっても治りっこない。お前たちのご主人の実情は、わしにはわかっとるし、仲良し同志のことだ。二三十円の金は立替えて上げてもいい」

と、ここまでいった時、妻君は立替えてくれると聞くなり、ベッドの陰から、すぐ相手の言葉を引き取って、

「胡さまのご親切、いつもながらのご好意、ほんにありがとう存じます。もし、あの外人のお医者さまが引き受けて下されば、どうかこちらへご同道願います」

「あの先生は、外国の大学で試験に通った人で、凄く有名な方だ。こんな病気が治せんくらいじゃ、医者の資格なしだね。それに、三十円という値段も、けっして高くはないですよ」

「そういうことなら、よろしくお世話願います」

胡二は立ち去ると、間もなくその先生を連れて来て、三十円で責任もつと約束し、保証状を書いた。さっそく、その外人先生は患者をしばらく治療したが、べつに薬を使うでもなかった。やっぱり外人医師

の伎倆はすばらしく、その日のうちにグンとよくなった。前後三回の治療を受けた結果、果たして少しずつ歩けるようになり、ビッコにもならずにすんだ。夫妻両人、もちろんたいへんな喜びようであった。

さて瞿の妻君は、宝小姐を義母にいただいてからは、亭主の足の件で二三日ごぶさたしたほかは、毎日のようにそこへ参上した。総督府の奥向きへも、小姐について二度伺候し、第九夫人も彼女を招待した。それほど親密になったとはいえぬが、よそ目には、もうたいした顔のききかただった。

そこで妻君は、まず宝小姐に主人の転職の件を頼み込んで、

「実を申しますと、うちの主人はこの省城に椅子を頂いた時から、随分と借金を背負いこんでおりました。幾つかお役目は頂きましたものの、省での費えが多く、給料だけでは生活費にもたりません。ただ今の官界のありさまでは、いい椅子にせよ、悪い椅子にせよ、ともかく何かの局に勤め口のある人には、何かというと人が金を借りに来ますので、かえって無官の浪人でいるほうがましなくらいでございます。ただいまの主人は、つまりそうした椅子あるがための損をいたしております。そのため借金はいよいよ大きくなります。お笑いになるかも存じませんが、こんなふうでもう二三年も勤めましたなら、スッカラカンになってしまいそうでございます。なにとぞお義母さま、わたくしを哀れと思し召し下さいませ。もしお義母さまに哀れんでいただけませぬなら、誰にもすがりようがございません」

この打ち明け話に、宝小姐は思わず慈悲心をおこし、わざわざそのために総督閣下のところへ足を運んで、まず第九夫人に話した。夫人がいうには、

「この件は、お前からお義父さまに直接申し上げたほうがいいよ」

「そりゃお義父さまにお頼みすれば、きっと引き受けて下さるでしょうけれど、やっぱりお義母さまにそばから太鼓たたいていただいたほうが、早くモノになりますわ」

第九夫人は承知した。宝小姐はすぐ閣下の執務室へ駆けつけて、瞿耐庵にいい本官の空きを見付けてやってほしいと、ねだりこんだ。閣下は初めのうちはウンといわず、

「あれには局のポストがあるんだから、何とか要領よくやれるはずだ。いまこの省城内の官吏候補たちは、十何年も待ち通しても、なんのお役目にもつけない人だってあるんだよ。あれもぜいたくをいっちゃいけないね」

彼女は閣下が不承知と見ると、たちまち甘えてしなだれかかり、部屋に人なしと見るや、その膝の上に横坐りになって、片手で閣下の耳を引っぱりながら、

「お義父さま。この件は私もう承知してやりましたのよ。あなたにイヤとおっしゃられては、私は合わせる顔がありませんわ」

というと、かくしからハンカチを取り出して泣きだした。こう纏いつかれては閣下もカブトを脱ぎ、しかたなく承知した。承知してもらえると、彼女はやっと泣くのをやめて、自分の席に帰った。

すぐそこへ第九夫人もはいって来て、〈太鼓をたたいて〉応援したので、もう閣下は拒みようもなく、面前で約束をして、あくる日、藩台に会ったら、瞿耐庵に本官のポストを世話させるといった。そこでやっと宝小姐は退出して行った。

さて瞿耐庵夫妻は、年はどちらも四十七八。ずっと子供なしであった。彼は子供が欲しくてたまらず、子のない寂しさを言い出すたびに、出るのは溜息ばかりである。心のうちでは妾を入れたかったが、家内がこわくて口には出せなかった。妻君のほうはその気持をちゃんと見

抜いていた。自分は子を産めないし、といって嫉妬心も人一倍だから、ほかのことなら何でも相談にのるが、妾を入れることだけは、相変らず頑強に拒んでいた。主人がしきりに子を欲しがるのを見ると、そばからけんめいに慰めつつ、

「子供が早くできるか遅く生まれるかは、これは運なのです。子供ができるという運さえ決まっていれば、いずれは生まれるはずですよ。何とかさんの奥さまは、五十でちゃんとおできになったわ。あたしらまだそんな年にもなってないんですから、そんなに焦ることないでしょう」

といったふうに何度かやり込められると、表向きは何も口を掘めなかったが、内心はやはり諦め切れなかった。友人たちはみな、彼が恐妻病患者であることを知っていて、何かの話になると、いつも彼を冷やかした。はじめは彼もムキになってやり返していたが、だんだんその噂が広がってくると、自分から承認してしまった。

ある日、一人の友人が彼を食事に招いたが、同席者はみんな女遊びの常連ばかり。二三人が相談の結果、二次会は揚子江を渡って漢口で茶屋酒を飲み、今夜は帰るまいということに一決した。一同みな賛成したが、ただ彼だけは黙っている。みんなは例の如く彼をからかい、奥さんが怖いんだろうだの、帰ったら土下座させられるんだろうだのと、冷やかした。彼はその時もう何杯か酒がはいっていたから、酔いの勢いの赴くところ、とたんに肝が太くなり、

「よし、いっしょに行こう」

といい放った。一同が、

「そりゃ本気かね」

と尋ねると、

「もちろん本気さ。おれはあいつにちょっと譲ってやってるだけなんだ。もしほんとうに怖がってるんだったら、この男一匹がすたるよ」

といわれて一同、こいつは珍しいこともあるものだと思った。その夜、ほんとうにみんなと漢口へ遊びに行ったのであるが、あくる日、酔いが冷めると、思わず後悔の念がおこり、女房の怒りが怖くなった。

帰館すると、役所の仕事の都合で、それに地方から強盗が護送されて来たが、臬台（按察使）から「君は事務堪能だから」といわれて、そいつの取調べを特に仰せつかり、それが一晩たっぷりかかった、それで帰れなかったんだ、などと作りごとをいった。

妻君はそれを真に受け、臬台から取調べを任されるとは名誉なことだと思って、追及どころか、大喜びである。ただひと言、こう付け加えた——

「公務なのでしたら、なぜ使いを出して知らせて下さらなかったのです、こちらも待ちぼうけ食わずにすむのに。それに夜は冷えこむんですから、着物を届けてあげるんでしたのに」

こう親身にいわれると、彼はただもう礼をいうばかりであった。

十日たち、半月たっても、彼が無事であるのを見ると、その後もしょっちゅう誰かが誘いに来た。はじめは何度も断わっていたが、やがてうまく女房を騙したことに味を占め、だんだん肝っ玉が太くなり、いつも悪友にくっついて遊び歩いていた。彼も女房持ちの人間ではあったが、しかしいつも睨みをきかせられてばかりいては、ただ怖いばかりで、楽しい語らいなぞありようもない。それが、ふとある日、女郎屋へあがって、女の手練手管にかかると、骨はとろけ筋もゆるんで、まったく生まれて初めての人心地、その楽しみのほどは思いやられる。

このころ、漢口に愛珠という女郎がいたが、姿はすこぶる平凡で、あまり景気もよくない。ところが瞿耐庵が戒を破って友人と茶屋酒を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com